
ダレカレシカレ

佐野 羊

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ダレカレシカレ

【Nコード】

N5779J

【作者名】

佐野 羊

【あらすじ】

ずっと転生を繰り返す奴に、ずっと同じ魂でいつづける女の子が、強く想われる話。「私なんて……」が心の中の口癖の女の子のどこがいいのか、でも奴は女の子がととてもとても大事。

奴、現る

ダレカレシカレ

なさはひとのためならずって、みんなが知ってる。

人のためにやってあげた良い行いは、めぐりめぐって自分にかえってくるんだよ、って。

だから、良いことしようね、って。

めぐりめぐって帰ってくるご褒美期待して人によい行いしなさいよ、ってこと。

けっきょくみんな、自分が一番かわいい。

朝起きたら、ゴミ出し忘れてた事に気がついた。ゴミ収集車のまぬけなメロディーが遠ざかっていく。ベランダにたまったゴミを見て、夏場じゃなくてよかったと思う。

ごみ袋は半透明の袋か、透明の袋じゃなきゃダメなのに、この前電気屋で電球買った時は、レジ袋がきれいな緑色でがっかりした。

よくいくスーパーのレジ袋が一枚5円の有料レジ袋になったからエコバックを使うようにしていたら、あつという間にゴミ用のレジ袋が無くなった。そうしたら袋入れが、くしゃくしゃになった透明のビニール袋だらけになった。お豆腐の買いすぎかなって思った。

毎日毎日主婦みたいなことばかり考えていたら、独り言も増えるって、誰が言ってたっけ。

「うあつー!!」

ちよつと恥ずかしい。びっくりした。

誰もいないところで一人すつころんだのに、おっきい声が出た。これって独り言に分類してもいいのかな？なんてのんきな脳みそがぐるぐる回る。あ、じめんに当たった。いたい。ほんと、いたい。

荷物を守るより、自分を守りたかったのか、荷物を前に思いつきり放り出して腕を交差させてエックス！みたいな感じでタイプした。何にも光線でてなかった。あたりまえだけど。

普段は「痛みに鈍感なんだよ」って、なんの自慢かわからないけど

怪我したらみんなにそういつてたのに、なんだ一人だったらいいたいんだ。アドレナリンがサボってるんだ。

めずらしくかわいらしい八百屋でリンゴなんか買っちゃったりして、ついでに無塩バターも買って、家でアップルパイでも作ろうかな、なんて、パイ生地から張り切って作っちゃおうかな、なんて思っちゃよとすごく機嫌が良くて、エコバック、じゃなくて今日は珍しくフランスパンが顔を出してそうなおしゃれな茶色い紙袋を両手で抱えて覗き込んでたら、ありえない場所に転がってた何かにありえない感じでマンガみたいにきれいに引つかかったんだ。

「いてっ」

って台本の自分のセリフの一番初めにあったみたい。

緊張しながら棒読みで奴は言った。

「いてっ」って。

私が引つかかってこけた原因は奴の腕で、奴の腕は夕方の竹林の、坂道のど真ん中にあった。奴の体は、大の字になって竹林の散歩道を遮るように横たわってた。

迷惑な奴。

奴、追ってくる 佐一の従者視点 (前書き)

あのようににしつこい奴は、世界で奴ひとりだけだと思います。佐一も、いい加減消してさしあげればよろしいのに、佐一は優しすぎるのです。奴がいるから、私が佐一にかまってもらえないのです。

奴、追ってくる 佐一の従者視点

私の中樞が佐一を探している。夢サーチで、佐一を探してる。寝なければ佐一に会えないだなんて、そんなのひどすぎます。

…ああ、見つけましたよ。

佐一サイチ、竹林で密会ですか。

りんごなんて転がしてすっころんでしまわれたのですね。

ケガ、してませんか？

痛くはありませんか？

奴に言い寄られてませんか？

ああ、言い寄られてるんですね。

それに膝とエックス！な腕がいたそうです。

でも大丈夫、私がただいま参ります。佐一のそばに、ただいま参りますから。

「ハヤセ！」

「こらハヤセ！」

「早瀬！！寝言は夜に言うもんだ！そうだろ！？授業中は私語も寝言も禁止なんだよ！！」

いけませんね・・・やってしまったようです。

いただけませんね寝てしまいました、ごう先生の授業なのに、やってしまいました。

教壇から革靴をかつんかつんと言わせながら私の机に近づいてまいりました。

「ハヤセ！　いいかげんに」

「はい、申し訳あり」

ばっつ

教科書が私を直撃する前になんとか起きて返事をしましたのに、ごう先生は丸めた教科書を振り下ろすスピードを落とすこともせず、私の頭に、ごいーんと打ち下ろしてこられました。ひどいですね。

…ああ。いたいです、佐一。

ごう先生の授業の残り時間のあいだ中、頭のとっぺんがジンジンと痛かったのですが、

全部の授業が終わって帰るときには、ごう先生のせいのできたたんこぶも無くなっていました。

ですが、1限目からごう先生のせいで恥をかいたので、今日はさっさと学校を出たくて夕焼けが輝き始める少し前に自転車に乗りました。

陽の傾きとともに伸びるながい自分の影を見つめながら、夢でみた、佐一に起こる出来事を思い出しております。

佐一は、夕焼けが輝くその時に、竹林で奴に会っていましたね。

佐一は、やっぱり想われているようです。

佐一は、まだ、想われてるんです。

佐一は、佐一は、佐一は・・・

私は佐一のことばかり考えてます。

いつつもいつつも佐一のことです。

それが仕える者として当たり前のことなのだけれど、

佐一佐一うるさい、と佐一に嫌われては本末転倒ですので、頭の中で、佐一のことを考えております。

佐一、佐一、

佐一、私は佐一に仕えるために、生きていますよ？

今回は女の姿で転生してまいりましたが、力は以前と相違ありません。

奴が佐一にひどいことをしようものなら、私はいつでも佐一のそばに参ります。

しかし困ったものです。

いつになったら、佐一は私を呼んでくれるのでしょうか？

奴、追ってくる 佐一の従者視点 (後書き)

両腕でエックス！の女の子の従者。夢サーチに転生と、ファンタジーチックな要素が出てまいりました。主人公の女の子は、従者がいる時点で平凡な女の子とは言えないのかも、しれませんね。

奴より、りんじ。(前書き)

もういいんだよって、前の時も、その前の時も言ったのに、奴は何度も何度も首を横に振る。

「何度でも会いに行きます」と思いを込めて。

奴より、しんじ」。

竹林の土と枯葉が緩衝材になるからといって、それらが衝撃を全部殺してくれるわけではない。

肘からは小さな血の玉が浮かんできていた。

肘よりはひどくないけれど、顎と膝もぶつけて、いろんなところがジンジンしびれる。

手をついて起き上がるうとしたら、手がチリッと痛んだ。
夕日が沈んで間もない薄暗い竹林では小さな傷がどうなってるかなんてわからないけど、傷の中に土が入ってるのが分かった。

「……しんじ」

勢いよく飛び出して、たった今登ってきた坂道を転げ落ちてコロコロン……。暗いくらい穴に向かってコロコロン……。

「そんなわけないよね。」

どこかのおじいさんのおにぎりじゃあるまいし、りんご達は落ちた所から動くことなく、しっとりとした湿り気を帯びた土の上におとなしく鎮座していた。

ふと思つて、りんごに伸びた手を止めた。

「・・・アップルパイにされて、嫌じゃないのかな」

フィリングにされて、熱されたオーブンでジワジワと焼かれることに、この子たちは耐えられるのかな。

タルトタタンに変更しようかと思つたけど、どっちにしてもオーブンでジワジワ焼かれるのは一緒だよな。

「逃げないでくれてありがとう」

紙袋に入れられた時点で決められたりんごの運命が、今塗り替えられようとしていたはずなのに、逃げずにおとなしく拾われるのを待っているりんご達を眺めていたら、アップルパイはこの子たちで作るべきじゃないって思えた。ああ、こんなんじゃ皮さえ向けずに、籠に盛るだけで終わっちゃいそう。食べずにいるのが一番ひどいんだって、分かっているけど。

顎と肘と膝と手のひらの傷が訴える痛みをゆっくりと頭の中で消しながら、りんごに付いた土を一つずつ丁寧に拭いて、紙袋に入れなおした。今度は飛び出さないように、奥のほうに、きっちり。

「あ。」

りんごに変な愛着が湧いておかしくなってしまった頭のまま地面に座り込んでぼーっとしていると、奴のことを思い出した。

ほんの30センチも離れていないところに人が倒れているのにリンゴに関心が行く人間って、そうそういないよね。

「遥花^{ハルカ}、怪我は？」

今度こそ体の向きを変えて、りんごじゃなくて、仰向けで大の字になっていた遥花を覗き込んだ。

「遥花ごめん、腕は痛む？」

服、湿っちゃったかな。

遙花の心配を頭の片隅でしながら服のことを考えてる。

地面に付いている面から、しっとり水を含んだ土を感じた。

あれ。

遙花が反応しないなんておかしい。

目もつむったままだし、眠ってるように見える。

さっき「いてっ」て言ったのに。

いつもの髪色、いつもの顔立ち、どれもいつもの遙花だけど、いつも私を映している遙花の真黒な目が見えなくて、少し不安になった。

りんごの心配してたのに、今度は遙花の心配。

心配事が多いと、疲れちゃうよね。

はるか、起きてよ。

はーるーかー

「・・・。」

『1000年たつても、1000年たつても、ずっと佐一のこと、この目に映し続けます』

「今年が1000年目だよ、遙花。」

遠い記憶がよみがえって、雨の匂いと両腕に感じたかすかな痛みを思い出した。

前日の思い出（前書き）

どうして毎回毎回おなじ私がつまれるんだろう。

久しぶりに早起したと思ったら、もう遙花が家の前に立っていた。

もう、ずっとずっと前の話。

前日の思い出

夏が終わって少し肌寒くなりはじめた、そんな季節。

放っておいてほしいと願うのに、それでも扉からつつすら分かる遙花のが着ている藍色がぼやりとみえて安心する私。

「おはよう佐一」

そつと戸を引くと、遙花の肩が見えたと同じ時に遙花の緑茶みたいな声が聞こえた。
深くしみる声。

「お、は、よう」

どうして朝からそんなに笑えるんだろうって思っけけれど、もしかしたら私がこんな性格だから、頑張って笑ってくれてるのかもっておもったら、申し訳なくなつて肩よりも上を見れなくなった。

「あがつてもいい？」

答えを返す前に、遙花はもう履物を脱ぎ始めていた。

「あ」

履物に目を落とすと、足の指に付いている細かい泥が気になった。
地面に着物がつかないように気をつけてしゃがんで、遙花についた

足の泥に触ろうとした。

「触らないで」

触れそうだった左足を半歩下げてそれだけ言つと遙花は一度外に出て、ぱしゃぱしゃと音が聞こえたと思つたら、足がきれいになつていた。

「きれいになつたね」

触つてほしくなかつたのかな、でも泥が付いてるんだから拭つても怒らないはずだね。

内心びくびくしながら立ち上がつて、さつと遙花から隠れるように家の中に入った。

この間遙花が作ってくれた机が部屋の真ん中に置いてある。それ以外にあるのは、早瀬が作ってくれたもの、買ってくれたもの。自分で買ったものも、選んだものも、何一つない、部屋。

「足をね」

「はきもの、濡れてたね。」

触つてほしくなかつたわけじゃないって、言ってくれようとしてるって、分かつた。

「佐一、足をね、」

「遙花、触らないでって、言おうとしたんじゃないって、わたしちやんと、分かつてる」

遥花は、私がちゃんと誤解してないって分かるまで、言つと思つた。ちゃんとわかってるよ。

「佐一、そうじゃなくて」

「触っちゃいやだった？」

思っていたことが違つて言われて、なんだろうって、胸がぎゅってなった。

「佐一。他の人の足に、触らないで。僕以外の誰も。」

僕以外って、ことは、遥花の足は触ってもいいってことだから、泥を拭ってもよかったのかな。

「足、触ったら、気持ち悪い、かな」

「佐一が、すき」

「」

「佐一が、すき。だから、嫌じゃないし、触ってくれたら嬉しい。でも、遥花の手が汚れるのは駄目。でも、泥拭ってくれようとして、今、めちゃくちゃうれしかったからやっぱり拭ってもらえばよかったかもって、思ってる。」

遥花は私のことが嫌いじゃなくて、足も触っても良くて、でも手が汚れちゃだめで、でも拭いたら喜んでくれるはずで、でも今は足は綺麗、あれ。

ふいに遥花は、すたすた外に出ていき、さっきとは別の綺麗な布を持って戻ってきた。

「ん。お願いします」

ささっと差し出された布と、綺麗な足が目に入って、そのまま隣の部屋までとたっと走って戸を閉めた。

顔が赤いのを、見られちゃだめなんだって、知ってたから。

綺麗な布で綺麗な足を拭いたら、私のけがれが付いてしまっただけだった。

他の人の血で血まみれのはずの手なのに、今はこうして白いまま。

補色残像で緑になった血が、目の前を覆い尽くす。

顔の赤さが引いても、手に付いた真っ赤で緑の血は、永遠に消えない。

戸のすぐ前で、しゃがんで出てくるのを待っててくれる遙花は、私に、何を求めてるんだろう。

ぱたぱたと戸に当たる雨が、はやく止んで、泥もはねなくなって、遙花が早く私のもとからいなくなればいいと思った。

深緑の自転車

あいかわらず竹林の中。

もうすっかり暗くなって、あと少ししたら、本当の夜になってしま
いそう。

遙花の髪、黒に藍色が溶け込んだ綺麗な色も、墨のような黒にしか
みえなくなってしまうた。

そんなに長い間座り込んでいた覚えは、無いのだけれど。

久しぶりに遙花に会って、何か感慨深さとか、そういう恰好の好い
感情が浮かんでくると思ったのに、遙花は目を瞑ったまま。さっき
の棒読みのようなせりふもすっかりなりを潜めて、ただただ竹林の
小さな小道を大胆に遮断している。

竹が夜風に倣ってさらさらと揺れる、綺麗なおとがした。

「佐一、お久しぶりです」

竹の声が聞こえたのかと思ったのは、ほんの一瞬。

さらりとした綺麗な髪、綺麗な目。竹の声なんかじゃない。

「早瀬……」

目を開けない遙花に動揺していたら、知らないうちに早瀬を呼んでしまっていたらしい。

早瀬とは夢の中でしか会えないものだと思っていただけけど、今度の世界でも、呼べば早瀬は来てくれると今知った。もう少し早く会いたかったと思うのは、私のエゴなのかな。

早瀬が来た方を見ると、少し遠くに早瀬のものと思われる綺麗な深緑色の自転車が見えた。ペダルはなぜがあり得ない明後日の方向に曲がっていたけれど、早瀬は涼しい顔をして、私の前にひざまずいていた。なんだか早瀬らしい。

「早瀬、もう遙花が来ちゃったの」

ひざまずかないで欲しいと思いつながら。

私がぼつりとつぶやくと、早瀬は柳眉をピクリとさせて、未だ目を開けない遙花を睨みつけた。

「また藍色を着て……。懲りない奴ですね」

早瀬は遙花が嫌いらしい。もう千年も前から。

「うん。そうだね……。取りあえず、早瀬。あの、遙花を私の家に運んでもらってもいい？」

遙花を家に連れて帰ろうと、一瞬藍色を掴もうと思ったけれど、なんとなく触れることは躊躇われて。

早瀬は大丈夫だろうか、頼んだ後でちらりと早瀬を見ると、一瞬ものすごく嫌そうな顔をした。

・・・私が命令するなんて、やはりおこがましかったかもしれない。

少し胸の奥がギュツとつまった感じ。

びくつとしたら、早瀬が顔の前でぶんぶん手を振った。

次の瞬間。私の手が早瀬の手で包まれていた。
少し暖かい。

「佐一」

「はい」

「またお会いできて、嬉しいです」

「わ、わたしも。・・・おかえり、早瀬」

胸の奥の痛みがさらりと消えて、早瀬の手から視線を上げると、嬉しそくに微笑む早瀬が見えた。

女神みたいとぼつり、つぶやいたら。早瀬がものすごく変な顔になった。

「早瀬は変顔も、すてき、だね。」

どういえば分からなくてそう言ったら、変顔をしたわけではありませんと、手をぎゅっと握んだまま力強く返された。

主人と従者は遥花の顔が歪んだことに気付かないまま。

変顔も素敵な早瀬と一緒に、あの自転車を直そう。

深緑の自転車2

かたかた、からり、からり。

やっぱり早瀬の自転車だったんだ。

早瀬が乗ってきた深緑の自転車は、ぐにやりとペダルが曲がってしまっていた。

なにかあったのか分からないけれど、とても乗れる様子ではないのに、

なんでもないといいた風に早瀬は倒れた自転車を起こし泥をさつと拭くと、遙花を左の肩に担いだままサドルにまたがった。

「どうぞ、佐一も後ろにお乗りください。」

カチリと自転車の灯りを点け、さも準備万端とでも言いたそうな早瀬の恰好は、蕎麦屋の出前の人そのもので。

垂直に曲がったペダルの先端。よく折れなかったなと感心してしまふそれに、女物の華奢な革の靴を、とんと乗せた早瀬。と、藍色がはたはたとはためく、蕎麦役の遙花。

ふっと笑みが零れた。

「さあ、佐一もお乗りください。」

再度早瀬に促され、やっと我に返ると、はっとして、はたはたと顔の前で手を振り、一歩後ずさった。

「あ、いいの。私は大丈夫。歩いて帰れるから。歩いて帰っても、そう遠くないし。」

遙を担いで私を後ろに乗せるなんて、無理にきまっている。苦笑してそう答えると、ほんの一瞬、早瀬が眉をひそめた。

「だめです。そういう問題ではありません。もう暗くなっていますから、一人で歩かせることはできません。」

「でも……」

二人も乗せて自転車をこぐなんて危ないし、警察に見つかったら罰金だし、それに、早瀬にそんなこと、してもらうのは申し訳ない……ぐるぐる頭の中で言い訳が回っていたとき。

早瀬は一度蕎麦屋ポーズを解くと、どさりと遙花を肩から落とした。

「早瀬！そんなことしちゃ……遙花！」

遙花が思い切り頭から地面にダイブしてしまった。早瀬は何故か風いだ目をしていた。

思わず叫び、早瀬の目の前に転がされた遙花の無事を確かめようと身をかがめた。

その時。

「きゃ」

「言うことを聞いてくださいませ。」

ほんの少し男っぽい声が聞こえて、ぐつと重力を感じたと思えば体が宙に浮き、自転車の後ろの席に着地していた。

「は、早瀬？」

驚いて早瀬を見つめると、早瀬はさつと体から手を離し、不機嫌そうな顔をしたまま私を見もせず、早瀬はハンドルをつかみ、バランスを取りながら再び遥花を担いだ。まるで物のように。

遥花は、倒れていた時よりも、更に泥まみれになってしまっていた。鬱陶しそうに制服のスカートを捌きサドルにまたがると、早瀬は感情を押し殺したような声で、呟いた。

「こいつを放って二人で帰っても、私は一向に構わないのですよ？」

かたかた、からり、からり。

「落ちないように、しっかり私を掴んでいてください」

へんなリズムをとりながら、誰も話さぬまま、自転車が進む。

まだぬかるむ道の上を、危なげなく過ぎていく。

不規則に揺れる自転車の上、はらりはらりと、揺れに合わせて流れる藍色のそれ。

左の遥花に重心を持って行かれないように、さりげなく体を後ろに傾けると、

まっすぐに前を見つめる早瀬の綺麗な横顔が見えた。

遙花と私とリンゴを乗せた自転車をこぐ早瀬は、私と違ってどこからみてもきれいだ。

こんなに綺麗で優しい早瀬を怒らせてしまったことが怖くて、恐ろしくて、早瀬の腰に回っていた手を、そっとほどいた。

「佐一？」

落ちたのではないかと思ったのか、早瀬が確かめるような目を一瞬こちらに向けた。

「ごめん、なさい。」

目を合わせることも怖くなって、うつむいたまま、謝った。リンゴの入った紙袋を両の手で握りしめると、クシャリ、乾いた音がした。

「なぜ謝るのですか」

「……ごめんなさい」

「……」

小さな溜息が聞こえて、もっと強く紙袋を握りしめた。

砂利道に入り、ガタガタと自転車が揺れた。

そのあとで。

キキ、ブレーキの音が聞こえて、自転車がとまった。

「……少し、強く言い過ぎました。怯えさせてしまって、申し訳

ありません。怒っていませんから、どうか・・・手を腰に。しっか
りつかまつてください。こいつのせいで・・・ひどくバランスが取
りづらいんです。」
変なりズムも、紙袋の音も聞こえない夜の中、ほんの少しやわらか
な声が頭の上から聞こえた。

うつむいた先にある、紙袋の中、
夜目が利く私の目に、りんごがちらりと映った。

かたかた、からり、からり。
静寂を破る、へんなリズムが、ぴりりとした空気も破る。

「あの・・・」
「はい、なんですか佐一」

返事が返ってきたことにほっと安心、して、
「どうして私の住まいを知っているの？」

何か話さないと。考えに考えた末、ふと浮かんだ疑問を口にだした。

三角と三角の間の四角い家。
それに向かって進む深緑の自転車。

あと数分もしないうちに、着くだろうその前に。

不機嫌な顔を、正面から見ることにしないように。

「それが従者の務めですから。部屋の間取りも、燃えるごみの収集日も、存じていますよ」

「そう、なの。・・・あの、じゃあ私の家に着いたら遙花」

ハンドルのゴムがみしみしと鳴る音が、へんなリズムによって？き消えた。

「佐一・・・お願いです。こいつの心配ばかり、しないでください。遙の世話は、私がきちんとします。・・・氷も、風呂の準備も、しておきますから」

「・・・うん。わかった。・・・はやせ」

「はい」

「・・・ありがとう」

たんこぶができたであろう遙花の頭を見つめて、少し震えてしまったけれど、謝罪ではなくて、感謝の言葉をだした。

かたかた、からり、からり。

恐る恐るまわしていた手を。

思い切って、ぎゅっと早瀬の腰に回して抱きつくくと、ペダルを踏み込む力が伝わってきた。

少し話せば怒らせてしまう。不快な気分にさせてしまう。そんな自

分はとても嫌い。

それでも、優しい早瀬はいつも、いつでも、最後には優しくしてくれる。いつかその優しさも、消えていってしまうのだろうかと思ったら、優しくされるのが怖くなる。

臆病な自分は、とても嫌い。

そんな自分を甘やかしてくれる、早瀬を、自分のもとに引きとめている、強欲な自分も、大嫌い。

嫌い嫌いと言いながら、現状に甘んじて、長い時を繰り返して生きていく自分は、もう人間などではないと思う。

私ができることは少ないけれど。

私が早瀬にできることは、少ないけれど。

早瀬の好きなパイを作ろう。

赤くて丸い果実を使ったパイ

食べたなら、地上へ追放されてしまう、果実を使ったパイ

追放されて何年目なのか忘れた人類が、好き好む、禁断の果実を使ったパイ

藍色の蕎麦（前書き）

三角と三角の間の四角い家。

住み着いた時からそう呼んでる家に、今は3人もひとがいる。
湯のみが足りない。

藍色の蕎麦

「必要になる前に必要をそろえるのが基本ですから」

女神のような顔でにこりと笑みを作ってくるりと鍵をまわした。

早瀬は本当によく知ってた。

三角と三角の間の四角い家のこと。

早瀬は遙花を担いだまま一番先に階段を上って鍵を開けた。
いつものまにスペアキーを作ったのかな。

さも当たり前にスカートポケットから取り出した鍵には、綺麗な
新緑の色をした【マガタマ】が銀色の鎖でつながれていた。

確かあのマガタマは、私がずいぶん昔にあげたものだった。

家のそばに。

私が駐輪所と決めた場所に、ペダルのひしゃげた新緑の自転車が新
たに一つ加わっていた。

明後日の方に曲がるペダルは、きっとこれからも折れることはない。

道理で、壊れないわけだわ。

「佐一の家は、相変わらず片付いていますね」

ひとり納得していると、扉を開けた早瀬が私を見た。

扉から見えたのは、一本の黄色い傘。それだけ。

「・・・何を買えばいいのか、分からないから」

何を買えばいいかわからないなんて、恥ずかしいこと。

雑貨やへ足を運べば、たくさん的小物があることを知っているけれど、

何を買えばいいのか、分からない。

色の意味も忘れて、傘しかないことに焦った。黄色い傘。黄色。きいろ。

恥ずかしくなって、手をきゅっと結んだ。

「細やかにまとまっついていて、良いと思います。佐一らしい」

「・・・そんなこと、ない」

早瀬は何だっけとほめてくれる。本当はまとまっついてなんかない。まとめるものなんて、この部屋にはないのだから。

せつかくほめてくれているのだから、素直にほほ笑むことができた

らしいのに。

右手を結んで、口も一文字。可愛げがない。嫌われてしまう。

「また、机でも作ろうか？」

緑茶みたいな声でした。

少し困った顔が早瀬の顔に乗る前に、鬼の顔が乗った。
般若みたいになった。

ひらり、

早瀬の肩から滑り降りた猫のような藍色は。

「遙花」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5779j/>

ダレカレシカレ

2011年5月29日07時11分発行